

◎令和7年度（2025年度）「横須賀市立小・中学校学習状況調査」及び「全国学力・学習状況調査」の結果について

本市児童生徒に「確かな学力」を育むためには、学校だけでなく家庭や地域のご協力が必要です。児童生徒の学力や学習状況の現状を理解していただくとともに、学校教育活動にも積極的なご支援をいただくためにも、本年度も「横須賀市立小・中学校学習状況調査」及び「全国学力・学習状況調査」の結果について公表します。（ただし、序列化や過度な競争につながらないようにするため、各学校の結果については公表しません。）

なお、本市では、限られた教科および学年を対象とした調査であること、それぞれの設問が学習指導要領で定められている学習目標・内容の全てを網羅するものではないことなどから、これらの調査結果は児童生徒の学力等の「一側面を示すもの」と考えています。

しかし、本調査結果を児童生徒の学習状況を客観的に把握するための資料の一つと捉え、今後の市の教育施策の充実や学校における学習指導の改善のために役立てていきたいと考えています。

1 横須賀市立小・中学校学習状況調査

小学校2～5年生と中学校1・2年生を対象とした「横須賀市立小・中学校学習状況調査」について、令和7年4月14日（月）～4月18日（金）に教科調査を、同年5月1日（木）～5月30日（金）に質問紙調査をそれぞれ実施しました。

本市が実施している学習状況調査は、他の自治体でも同一の問題を用いて実施されており、各学年、各教科概ね13万人から20万人が参加しています。よって、参加人数全体の平均を全国平均とみなし、本市の結果と比較しています。

（1）調査の概要

ア 調査の目的

本市の児童生徒の学習状況を把握・分析し、その調査結果を各学校の指導方法の工夫・改善及び児童生徒の学習に役立て、本市として必要な施策の策定に資することを目的としています。

イ 調査事項

小学校2～5年生：①国語（聞き取り 有） ②算数 ③質問紙

中学校1・2年生：①国語（聞き取り 有） ②数学 ③質問紙

※各学年・各教科、前学年までの履修内容を出題範囲としています。

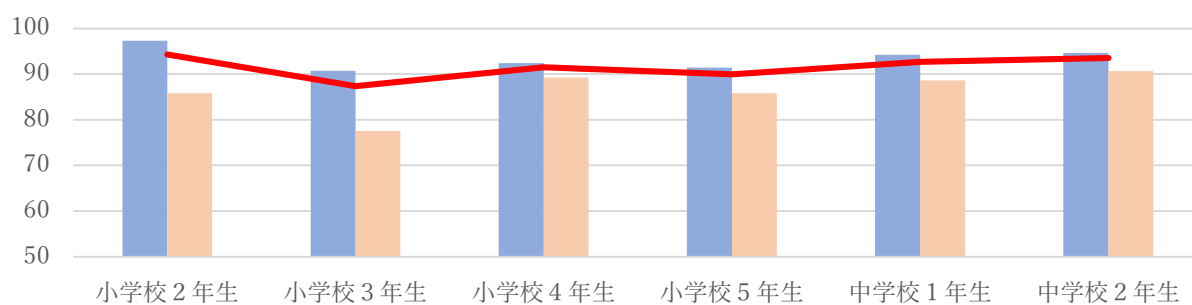
(2) 横須賀市立学校の教科別結果

全国平均正答率を 100 としたときの本市の正答率は、以下のとおりです。

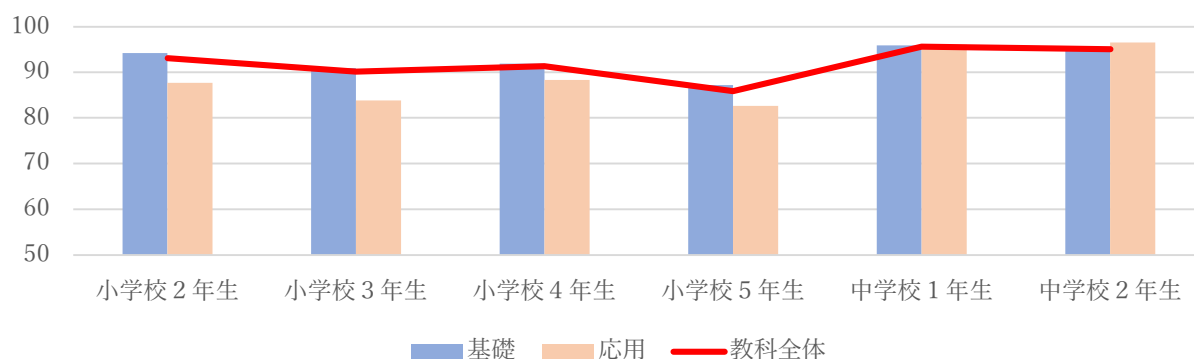
※ () 内の数字は前年度との差

	国語			算数・数学		
	教科全体	基礎	応用	教科全体	基礎	応用
小学校 2 年生	94.3 (0.8)	97.3 (2.6)	85.8 (-4.1)	93.1 (-4.5)	94.2 (-4.1)	87.7 (-6.3)
小学校 3 年生	87.4 (-1.5)	90.7 (0)	77.5 (-6.1)	90.1 (-0.8)	90.9 (-1.3)	83.8 (-1.7)
小学校 4 年生	91.5 (3.9)	92.4 (5.0)	89.2 (1.0)	91.3 (-0.2)	91.9 (0.1)	88.3 (-2.5)
小学校 5 年生	89.9 (-1.6)	91.4 (-0.4)	85.8 (-4.9)	85.9 (-4.9)	87.2 (-4.7)	82.6 (-5.4)
中学校 1 年生	92.7 (-1.6)	94.2 (0.1)	88.6 (-5.9)	95.6 (1.8)	95.9 (2.3)	96.0 (1.2)
中学校 2 年生	93.5 (-2.2)	94.6 (-0.4)	90.6 (-6.9)	95.0 (1.0)	94.7 (-0.5)	96.5 (6.3)

国 語



算数・数学



【国語】

小学校においては、本市平均正答率は、基礎・応用いずれも全国平均正答率を下回りました。

領域別に見ると、「話すこと・聞くこと」は、全国平均正答率と同程度でした。一方、「読むこと」や「書くこと」は、各学年で全国平均正答率を下回りました。

特に「書くこと」については、例えば低学年では、事柄の順序や内容のまとまりが分かるように丁寧に指導すること、中学年では、身近な出来事について、気軽に文章を書くことができるように、日頃からまとまりのある短い文章を書く機会を増やすこと、高学年では、ある程度の長さの文章を書くためには、何をどのように書くかという見通しをもつことなど、児童が書くことの楽しさやその必要性を感じられるように工夫した指導を目指します。

また、児童が難しさを感じるものの一つに「文章の書き出し」が挙げられますが、テーマや問題文などにある文言を使えば、書き出しがスムーズになることを実感できます。書くことにも粘り強く取り組めるように、指導を工夫します。

中学校においても、本市平均正答率は、基礎・応用いずれも全国平均正答率を下回りました。

領域別に見ると、「情報の扱い方に関する事項」、「読むこと」、「話すこと・聞くこと」、「言葉の特徴や使い方に関する事項」は、全国正答率と同程度でした。一方、「書くこと」は、各学年で全国平均正答率を下回りました。

特に「書くこと」については、目的や意図に応じて、伝えたいことを明確にすることが求められます。日頃から、自分の考えを200字程度にまとめて書く活動を取り入れ、それを300字、400字と増やしていき、書くことの経験を積めるように指導計画を作成することが大切になります。また、自分の考えの理由を書く際には、適切な根拠を考えたり、クラスの人々の様々な意見等に触れたりすることが不可欠です。説得力のある意見には必ず明確な根拠があることを実感できるようにすること、そして、文章を書くための基礎的な知識を活用できるように、計画的に「書くこと」に関する指導を実施します。

【算数・数学】

小学校においては、本市平均正答率は、基礎・応用いずれも全国平均正答率を下回りました。

領域別に見ると、学年が進むにつれて全国平均正答率との差が出る傾向がありました。

特に「図形」領域については、全学年で課題が見られました。身の回りの物や色板などを使って図形を作ったり分解したりすること、紙を折ったり切ったりして図形を作るなど、体験を通して学ぶことが重要になります。これらの活動を通して、図形を構成する要素やそれらの位置関係に着目して、図形の構成の仕方や性質について考察し、「なぜそうなるのか」説明する機会を増やすといった工夫した指導を目指します。

また、作図においては、単に作図することができるようにするだけでなく、その手

順や方法と図形の性質を関連付けて、図形の性質の理解を深めることができるように指導を工夫します。

中学校においては、本市平均正答率は、基礎・応用いずれも全国平均正答率を下回りました。

領域別に見ると、本市の平均正答率はいずれも全国の平均正答率を下回りましたが、その差は4ポイント未満でした。

特に、「データの活用」については課題が見られました。小学校では統計的な問題の解決方法や統計的に考察したり表現したりしています。その学習の上に立って、合理的な処理の仕方が重要であることを理解できるように指導する必要があります。また、範囲、相対度数、累積相対度数などについて理解し、データの傾向を読み取り、批判的に考察し判断することも必要です。そのために、処理した結果を基にデータの傾向を読み取ったり考察し判断したりすることを重視し、用語を適切に用いながら、自分の考えやその根拠となる事柄について説明したり、他者の考えや意見を基に自分の考えを振り返ったりすることができるような場面の設定と工夫した指導を目指します。

上述のとおり、学年・教科によって傾向は異なりますが、全ての学年・教科において、本市の児童生徒の平均正答率は、全国の平均正答率を下回っています。

各学年・教科の課題については結果とともに示します。また、各学年・教科の指導改善のポイントについては、各学校に示します。

学年・教科によっても異なりますが、自分の考えや根拠を明確にして説明したり、条件に沿って作文を書いたりするなど、記述することに課題が見られる傾向があります。教科を問わず、日々の授業において、自分の考えを表現したり、記述したりする力を育成することができるよう、引き続き授業改善を図ります。

(3) 質問紙調査結果

質問紙調査における個々の質問を、表に示すカテゴリーに分類しています。それぞれのカテゴリーに分類される一つ一つの質問について、「最も望ましい／良好な選択肢」「次に望ましい／良好な選択肢」「改善／配慮を要する選択肢」「特に改善／配慮を要する選択肢」を点数化し、どの程度の児童生徒が肯定的な選択肢を選んだかを数値化しています。その数値をさらに、全国平均を 50 とする偏差値として算出した値を示しています。

		小 2	小 3	小 4	小 5	中 1	中 2
自己認識	家族のささえ	49.7	49.9	50.0	49.8	50.1	49.6
	友だちのささえ	49.8	49.8	49.3	49.3	49.6	50.2
	先生のささえ	50.3	50.5	50.0	49.5	49.7	50.0
	成功体験と自信	49.6	50.1	50.1	49.6	50.0	50.0
	充実感と向上心	49.3	50.0	50.0	49.4	50.1	49.9
	感動体験	49.9	50.3	49.7	49.6	50.3	50.3
	他者からの評価	－	49.7	49.6	49.5	50.3	50.6
社会性	規範意識	49.7	50.0	50.2	49.3	49.0	48.4
	思いやり（人間関係構築力）	50.2	50.2	50.1	49.3	49.5	49.6
	発信力	50.2	50.4	50.2	49.5	50.1	50.3
	対話・話し合い	49.3	49.7	49.5	49.9	52.1	52.5
	社会参画	－	－	－	49.5	49.9	49.6
学級環境	学級の規範意識	49.3	50.6	50.9	50.1	50.8	49.2
	学級の絆	49.9	50.2	49.7	49.2	50.3	49.7
	いじめのサイン	48.7	48.8	49.0	48.3	48.4	47.9
	対人ストレス	49.0	49.1	48.7	48.2	47.8	48.2
生活・ 学習習慣	生活習慣	49.5	49.6	49.6	49.8	49.5	49.3
	学習習慣	48.7	48.2	48.3	47.2	47.2	48.5
	学習意欲	49.2	50.3	50.0	49.5	50.0	49.7

※発達の段階や特性に合わせて質問が設定されているため、学年によって質問のない項目があります。

※全国平均＋2ポイント以上で  、全国平均－2ポイント以下で 

自己認識にかかわる項目については、いずれの学年においても全国と同程度と捉えることができます。

社会性にかかわる項目のうち、「対話・話し合い」については、概ね学年が上がるごとに、値が大きくなっています。各校の発達の段階や特性に応じて対話や話し合いの活動を多く取り入れているとともに、児童生徒がその意義を実感していると捉えることができます。

学級環境にかかわる項目のうち、「いじめのサイン」「対人ストレス」については、全ての学年において全国平均をやや下回っています。一人一人の状況を積極的に把握し、適切な指導及び支援を行うことが求められます。

生活・学習習慣にかかわる項目のうち、「学習習慣」については他の項目よりも低い値となっています。学校と家庭が連携しながら学習習慣が形成され、その啓発が進むよう検討します。

2 全国学力・学習状況調査

小学校 6 年生と中学校 3 年生を対象とした「全国学力・学習状況調査」について、令和 7 年 4 月 17 日（木）（中学校理科については、4 月 14 日～17 日のうち 1 日）に実施されました。

（１）調査の概要

ア 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

イ 児童生徒に対する調査事項

（ア）教科に関する調査

＊小学校調査は、国語、算数及び理科とし、中学校調査は、国語、数学及び理科とする。国語、算数、数学及び小学校理科は、冊子を用いた筆記方式（以下「PBT」（= Paper Based Testing）という。）で実施する。中学校理科は、生徒が活用する ICT 端末等を用いた、文部科学省 CBT システム（以下「MEXCBT」という。）によるオンライン方式（以下「CBT」（= Computer Based Testing）という。）で実施する。

＊出題範囲は、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容は、それぞれの学年・教科に関し、以下のとおりとする。

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

＊調査問題では、上記①と②を一体的に問うこととする。出題形式については、記述式の問題を一定割合で導入する。

（イ）質問調査

＊調査する学年の児童生徒を対象に、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問調査（以下、児童を対象とする場合は「児童質問調査」、生徒を対象とする場合は「生徒質問調査」、児童及び生徒を対象とする場合は「児童生徒質問調査」という。）を、児童生徒の活用する ICT 端末等を用いた CBT（生徒質問調査にあつては、MEXCBT による CBT）で実施する。

(2) 教科別結果

【小学校 6 年生】

	国 語	算 数	理 科
全国平均正答率	66.8	58.0	57.1
本市平均正答率	62.0	53.0	52.0
全国平均正答率を 100 としたときの 本市の正答率	92.8	91.4	91.1
前年度との差	-0.3	-1.7	-5.3

各教科の全体的な傾向および課題の見られる事項

【国語】

本市平均正答率は、いずれの設問においても全国平均正答率を下回りました。

領域別に見ると、特に「言葉の特徴や使い方に関する事項」について課題が見られました。これまで学んできた言葉に関する学びを自覚できるようにするとともに、文や文章の中で適切に使用できるように、指導を工夫します。

【算数】

本市平均正答率は、いずれの設問においても全国平均正答率を下回りました。

領域別に見ると、特に「測定」について課題が見られました。その中でも、はかりの目盛りを読むことに課題が見られました。はかりの目盛りの仕組みを、ものさしや 1 リットルます、数直線の目盛りの仕組みと関連付けながら理解できるようにするなど指導を工夫します。

【理科】

本市平均正答率は、いずれの設問においても全国平均正答率を下回りました。

領域別に見ると、特に「「粒子」を柱とする領域」について課題が見られました。実験器具の名前や扱い方を理解できるようにするとともに、児童が自然の事物・現象から得た情報を、他者の気付きの視点で分析して、解釈し、自分の考えをもち、その内容を記述できるように指導を工夫します。

【中学校 3 年生】

	国 語	数 学	理 科		
			【1】	【2】～【9】	※平均 IRT スコア
全国平均正答率	54.3	48.3	2.9	2.0/1.9/2.3/2.3	503
本市平均正答率	53.0	47.0	3.1	2.0/1.8/2.4/2.3	508
全国平均正答率を 100 としたときの 本市の正答率	97.6	97.3	106.9	100/94.7/ 104.3/100	101.0
前年度との差	-0.5	0.2	—	—	—

各教科の全体的な傾向および課題の見られる事項

【国語】

本市平均正答率は、設問によっては全国平均正答率を上回るものもありましたが、多くの設問で全国平均正答率を下回りました。

領域別に見ると、特に「書くこと」について課題が見られました。文章を推敲する際には、読み手の立場に立って、表記や表現の効果等を確認めて、文章を整えることができるかどうかをみることが重要になります。また、自分の考えが伝わる文章にするために、根拠を明確にして書くことができるよう指導を工夫します。

【数学】

本市平均正答率は、設問によっては全国平均正答率を上回るものもありましたが、多くの設問で全国平均正答率を下回りました。

領域別に見ると、特に「データの活用」について課題が見られました。その中でも相対度数を求めることに課題が見られ、階級の度数の総度数に対する割合を求めて、データの特性を読み取る活動を通して、相対度数の必要性和意味を理解できるように指導を工夫します。

【理科】

本市平均正答率は、多くの設問で全国平均正答率を上回りました。

特に全国平均正答率を上回ったのは、「エネルギー」を柱とする領域でした。一方、「地球」を柱とする領域では課題が見られました。地域の言い伝えを科学的に探究する学習場面において、大地の変化と、地層の様子やその構成物に関する知識及び技能を関連付けて、地層の重なり方や広がり方を推定できるかどうかをみる設問では、本市の平均正答率が低かったため、理科の見方・考え方を働かせる場面を意識し、本市の地形等を調べる活動や博物館と連携する学習を取り入れるなど、指導を工夫します。

※「IRT (Item Response Theory)」とは、児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるか、児童生徒の学力によるかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論。国際的な学力調査（PISA、TIMSS など）や英語資格・検定試験（TOEIC・TOEFL など）で採用されているテスト理論でもある。この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じ尺度で比較することができる。

（参考）文部科学省「令和7年度全国学力・学習状況調査「中学校理科」IRTを用いた結果返却について」 2025年9月閲覧

https://www.mext.go.jp/content/20250710-mxt_chousa02-000043584.pdf

中学校3年生の理科を除く学年・教科において、本市の児童生徒の平均正答率は、全国の公立学校の児童生徒全体の平均正答率を下回りました。

調査結果の分析から得られたことを活用し、今後も、日々の授業において、自分の考えを記述するなど「表現する力」を伸ばすことができるように指導するとともに、「粘り強く課題に取り組む力」が育成されるよう、指導改善を図ります。

(3) 質問調査結果

質問調査における小学校6年生・中学校3年生それぞれの質問事項のうち、本市の児童生徒の傾向と、全国の公立学校の児童生徒全体の傾向とが大きく異なった事項は次のとおりです。

なお、以下に示す割合は、各設問の選択肢における肯定的回答（注1）をした児童生徒の割合であり、本市と全国の値を比較し、その差が5ポイント以上の質問事項について示しています。複数の選択肢を挙げているものについては、それらの合計となっています。

（注1） 肯定的回答は、「当てはまる」と「どちらかといえば、当てはまる」や「できている」と「どちらかといえば、できている」、「とてもそう思う」と「そう思う」を合計したものなどです。また、これらに当たらない選択肢については、質問事項にその選択肢を記載しています。

【小学校6年生】

5ポイント以上低い質問事項

(%)

質問 番号	質問事項	本年度	前年度
		本市 (全国との差)	本市 (全国との差)
(10)	困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか	63.4 (-7.2)	60.6 (-6.5)
(16)	分からないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか	76.4 (-5.3)	73.2 (-7.5)
(17)	学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む） ※この肯定的回答は、「3時間以上」、「2時間以上、3時間より少ない」、「1時間以上、2時間より少ない」を合計したもの	42.5 (-11.5)	41.5 (-13.1)

(18)	土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強しますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む） ※この肯定的回答は、「4時間以上」、「3時間以上、4時間より少ない」、「2時間以上、3時間より少ない」を合計したもの	13.5 (-8.0)	13.9 (-7.9)
(24)	読書は好きですか	62.4 (-7.3)	—
(29-3)	あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って情報を整理する（図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる）ことができると思えますか	63.4 (-5.9)	—
(36)	学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか	74.4 (-5.0)	74.9 (-5.9)
(44)	国語の勉強は得意だ	54.2 (-7.2)	—
(45)	国語の勉強は好きだ	51.5 (-6.8)	53.1 (-8.9)
(65)	理科の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できていますか	57.5 (-5.7)	—
(66)	自然の中や日常生活、理科の授業において、理科に関する疑問を持ったり問題を見いだしたりしていますか	63.6 (-5.3)	82.0 (-1.2)
(70)	理科の授業で、観察や実験の進め方や考え方が間違っていないかを振り返って考えていますか	71.0 (-5.0)	—

【中学校 3 年生】

5 ポイント以上低い質問事項

(%)

質問 番号	質問事項	本年度	前年度
		本市 (全国との差)	本市 (全国との差)
(10)	困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか	64.6 (-8.6)	56.9 (-10.6)
(24)	読書は好きですか	55.9 (-5.7)	—
(66)	理科の授業で学習した考え方を普段の生活の中で活用できていますか	45.7 (-5.0)	—

5 ポイント以上高い質問事項

(%)

質問 番号	質問事項	本年度	前年度
		本市 (全国との差)	本市 (全国との差)
(28)	1、2 年生のときに受けた授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器を、どの程度使用しましたか ※この肯定的回答は、「ほぼ毎日（1 日に複数回の授業で活用）」「ほぼ毎日（1 日に 1 回くらいの授業）」、「週 3 回以上」を合計したもの	93.9 (+17.4)	84.5 (+20.1)
(29-3)	あなたは自分が PC・タブレットなどの ICT 機器を使って情報を整理する（図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる）ことができると思いますか	69.0 (+5.7)	—
(29-4)	あなたは自分が PC・タブレットなどの ICT 機器を使って学校のプレゼンテーション（発表のスライド）を作成することができると思いますか	85.6 (+9.0)	—
(31)	1、2 年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか	76.4 (+13.4)	74.0 (+9.2)

(33)	1、2年生のときに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか	77.6 (+7.0)	80.2 (+4.8)
(40)	総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか	88.9 (+9.4)	88.8 (+6.6)
(58)	数学の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っていますか	69.2 (+10.6)	—
(70)	理科の授業で、課題について観察や実験をして調べていく中で、自分や友達の学びが深まったか、あるいは、新たに調べたいことが見つかったか、振り返っていますか	74.0 (+5.6)	—

小中学校共に課題となっているのが「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」、「読書は好きですか」、「理科の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できていますか」の設問に対する肯定的な回答の割合が低いことです。

各学校で児童生徒一人一人の状況を把握し、相談しやすい環境や風土をつくっていくように、具体的な取組を検討する必要があると捉えています。

「読書」や「理科」に関することについては、新たな課題として挙がりました。各担当教員や学校司書と連携して、各学校で状況を分析し、読書や理科による学びの楽しさや、学んだことを日常生活に当てはめてみようとする態度の育成を目指して、指導計画や学校図書館及び理科室などの環境整備についても見直す必要があります。

小学校において大きな課題と捉えられるのは、「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」についてです。

学校と家庭が互いに連携しながら児童の資質・能力を育成できるよう、目指す学びの姿について共有し、児童に寄り添った指導を目指していく必要があります。

中学校においては肯定的な回答が多く、これまでの取組の成果と捉えています。特に1人1台端末の活用はすでに習慣化されており、生徒が自分の学習状況に応じて表現方法を選択できるような指導が行われていると捉えることができます。

また、「理科」においては課題解決に向けて、主体的・対話的で深い学びの実現に関する肯定的な回答も得られているため、それが学校の中で完結するものではなく、日常生活でも実感できるよう、指導を工夫する必要があることが分かりました。

3 今後の取組について

学習状況調査の結果を踏まえるとともに、横須賀市学力向上推進プランが掲げる3つの目標（目標1 学び合う集団の育成を図る／目標2 粘り強く学ぶ力の育成を図る／目標3 学力層全体の引き上げを図る）に照らし、それぞれの視点で分析し、今後の学力向上の取組の充実を図ります。

（1）目標1（学び合う集団の育成を図る）の視点

ア 児童生徒が主体的・対話的に臨む授業づくり

児童生徒の学力向上においては、児童生徒が学びを自分事として捉え、主体的・対話的に授業に参加しようとする意識を高めることが大切です。それが、知識及び技能の習得や、思考力、判断力、表現力等の育成へとつながるため、教師の指導改善の視点を示し、授業を充実させます。

イ 自分のことを大切な存在だと実感できるような授業づくり

児童生徒の自己肯定感を高めるには、「認められている」と実感するような経験が重要です。誰かが発した疑問や意見について、みんなで真剣に考えたり、共感したりする「日常的に自由に話し合える風土づくり」や「安心して学ぶことができる教師との関わり」を目指します。

（2）目標2（粘り強く学ぶ力の育成を図る）の視点

ア 難しい課題に対しても工夫して解決しようとする経験

「難しい課題」とは、児童生徒の可能性や能力を一步高めるような挑戦的な課題です。粘り強く学ぶ力の向上を図るためには、そのような課題に対してもあきらめずに工夫して解決しようとするような経験を積ませることが重要です。そのためには、「必然性のある動機付け」を大切にした単元や題材などの指導と評価計画になるようにします。

イ 一人でもあきらめず課題にチャレンジする経験

グループで課題を解決する学習活動においても、個々の学ぶ力がどう向上しているかを見取ることが大切です。グループ活動に入る前に、自分なりの考えをまとめてみることや、グループ活動が終わった後で、自分の考えの変容や友だちから学んだことを一人一人が言語化することも重要です。児童生徒が、「自身の学びを自覚し、実感を伴った振り返り」になるよう、振り返りの場面の指導も充実することを目指します。

(3) 目標3（学力層全体の引き上げを図る）の視点

ア 個に応じた指導の充実

学力層の全体的な引き上げを図るためには、目標1・2に示したような授業改善を進めつつ、個に応じた指導の充実を図ることが重要です。児童生徒の学びを1時間単位ではなく、単元や題材全体を一連の学びとして捉え、長期的な視点で一人一人の学び方に目を向ける指導を目指します。

イ 同一集団の経年変化を追い、各学年の状況を分析

同一集団の経年変化を追うことで、児童生徒の学習集団としての成長を可視化し、長期的な視点から指導の成果や課題を捉えることができます。調査を行う全ての学年において、前年度からの「学習集団としての成長」を分析し、それを児童生徒はもちろん、保護者とも共有できるようにします。